慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロバート･J･アレクサンダー著『ラテン･アメリカにおける共産主義』
Sub Title	Robert J. Alexander : Communism in Latin America
Author	賀川, 俊彦(Kagawa, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.6 (1959. 6) ,p.79- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590615-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Robert J. Alexander: Communism in Latin America

Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 1957. Pp. X, 449.

ロバート・J・アレクサンダー著

『ラテン・アメリカにおける共産主義』

一　アジア、アフリカ、中近東などの諸地域における共産主義運動に向けられた西歐自由主義陣營の觸覺にはきわめて敏感なものがあるが、ことラテン・アメリカとなるとその地理的關係あるいは地域的機構組織からくる安堵感の故か、ほとんど無視されてきたのが實情である。ところが、たまたま、一九五四年にグァテマラが共産圏から武器を購入した事件を契機として、米洲における共産主義に對する關心が急激に昂まった。第一〇回米洲會議では共産主義浸透防止對策について眞劍な討議が繰返されている。

しかし、極端な警戒心や脅怖心からは均衡のとれた判斷が生れる筈がなく、これまで、えてして純粋な民族主義運動を共産主義運動とみなしたり、あるいはその指導者たちをして國際コミンテルンの走狗であると斷定するなどの過ちを犯しがちであつた。こうした過ちが素直に認められた場合はとにかく、誤斷のまま對策が打出された場合にはどのようなことになるだろうか。その結果が共産主義を有利に導くことになるのは明らかである。本書はラテン・アメリカにおける共産主義運動の實態を究めることによつて、こうしたギャップを調整することを目的としている。

二　本書の構成は三部からなる。第一部ではラテン・アメリカ地域における共産主義運動の歴史的背景からその將來のプロスペクトを六章に分けて詳細に論述している。はじめに、革命と獨裁による疲弊しきつた政治的貧困や外國資本によつて搾取されてきた經濟的貧困など、ラテン・アメリカが病菌を養うに好適な環境を提供していることを指摘し、續いて第一次世界大戰の終つた一九二〇年代における共産黨の擡頭から第二次大戰後の今日までの盛衰の變遷過程について歴史的アプローチを展開している。だが、その間にラテン・アメリカの共産黨あるいは共産主義者と國際コミンテルンまたはソ連との政治的指導ないし經濟的連繋などの諸關係を論じ、政治資金の供給關係までも明るみに出す一方、現代共産主義戰術ラテ

ン・アメリカ版といつたものの實際的分析をも忘れてはいない。

ここに代表的な共産主義戰術の一例を紹介しておこう。これは一九四〇年代後期から一九五〇年代初期にかけてアルゼンチン、ペルー、ヴェネズェラ、キューバなど獨裁政權下の諸國に同時的集中的に採用された新戰術である。概して共産黨は反政府的立場を固執してきたものだが、新戰術によれば公式の共産黨とは別に政權支持を標榜する政黨もしくは政治團體を組織して兩面作戰を企圖したのであつた。政治の不安定な場においては、このような手段を選ばぬやり方でも共産黨の保全と擴張のために相當の効を奏したという。しかし、結局、かかる姑息的手段は、政權の安定とともにかえつて共産主義の衰頽を早める原因となつたようだ（一三―四頁）。第一部はこういつた記述のために非常な新鮮味が添えられており、興味が自然に唆られるのを禁じえない。

三　第二部ではこのような共産主義運動が國家別に一一章にわたつて取上げられ、各國の勞働組合運動を通じた共産主義者たちの實際的活動狀況が詳細に畫かれる。著者が一九四六年から一〇年間、毎年ラテン・アメリカの各地を旅行し、ブラウダー（Earl Browder―合衆國共産黨書記長であり、ラテン・アメリカ共産黨にも非常な權力をもつている）、トレダーノ（Vicente Lombardo Toledano―メキシコ勞働組合書記長）、アヤ・デ・ラ・トールレ（V. R. Haya de la Torre―ラテン・アメリカ共産主義運動の黑幕的存在）などをはじめとして、各國の共産主義者や勞働組合運動指導者らを實際にインターヴューした成果が本書に實つたのであるが、その努力の跡はこの第二部から實感をもつて味わうことができる。なお、共産黨總會や勞働組合諸團體の發行した出版物が、簡單なパンフレットにいたるまできわめて豐富に資料として用いられている點にも一驚させられる。また、ここではラテン・アメリカ諸國における共産主義者や政黨だけでなしに、これに關係もしくは對抗的人物、政黨、あるいは政治結社、勞働組合諸團體なども網羅されているので、第二部は“who's who”のラテン・アメリカ版のごとき盛觀を呈している。しかし、多彩な見せかけに比して實質的な深みに缺けた點にしばしば遭遇するのは如何とも殘念なことである。

四　第一部の歷史的アプローチ、第二部のフィールド・リサーチから轉じて、第三部では合衆國の共産主義浸透防止對策について建設的論議を開陳するのだが、そのパースペクティヴを注目に價する分析と勸告を通して提供している。すなわち、第一に「ラテン・アメリカの共産主義者は愛國的な農地改革者あるいは過激論者ではなく、ソ連から資金を仰ぎ國際コミンテルンの指導を受けている紐つきの共産主義者である」、第二に「かれらのもつとも苦手とする對抗勢力は、ラテン・アメリカの將來に必須の社會革命を民主的方法

で齎らそうとする民主左派諸勢力である」といった分析的結果から、次のような勸告に結んでいる。「合衆國は民主左派とみなされる政黨や勞働組合を援助すべく努力しなくてはならない」、また「獨裁政權に對して榮譽や軍事援助を與えることは差控えねばならない」(三九九頁)。

概して、共產黨は獨裁制下にあつてもつとも强力を誇つており、その反面、ペルーのアプリスタ(Apristas)運動やヴェネズェラの民主主義同盟(Acción Democrática)など民主左派勢力の擡頭とともに沈滯したことが實證されている。だが、この場合、目的達成のためには手段を選ばぬ共產主義者が、民主左派諸勢力に潛入、便乘したことも否みえない事實がある。とは云え、ラテン・アメリカの正しいデモクラシーの發展のために、合衆國はこれまでのような獨裁政權の保護政策は速やかに撤回し、新たな勇氣をもつて胎動するラテン・アメリカを導くことを必要とすることは云うまでもなかろう。

五　全體を通讀して云えることは、本書が著者の多年にわたるフィールド・リサーチの成果として、單なる資料調査からはもたらされえない知識の領域と新鮮さとを備えていることに對して、各國政治家たちとのインターヴューの價値についていかなる批判があれ、ここに深く敬意を表するものである。

しかし、最後に一つだけ遺憾ながら記さねばならない。それは著者がこれほどの大册をものにしておきながら、各個人の黨派別分類のために何ら明確にして實際的な範疇をも設けなかつた點である。黨員資格自體が不明確な今日であるとは云え、同一人物に對して「共產主義者」、「スターリン主義者」と名指しながら、同時にまた「容共主義者」と呼稱することの輕卒さは全く理解しえない。甚だしい場合は「反共產主義者」、「非共產主義者」、「非マルキスト」なる呼名が同一メキシコ人に對して三頁以內に出ている(六〇—二頁)。

この傾向はロンバルド・トレダーノに言及する場合に決定的なものがある。すなわち、かれは「容共主義者」(二四頁)、「かりに共產黨員でないとしても、容共主義者として認められている」(二七頁)、「中米諸國の共產黨においてきわめて重要な役割を果した」(四〇頁)まではまだよいとしても、「この半球における國際共產主義機關の樞要な地位を占める……」(三九頁)「共產主義ラテン・アメリカ勞働組合(Confedración de Trabajadores de América Latina, communist)の首領」(四一頁)であるにもかかわらず「メキシコ共產黨への入黨は拒絕した」(一四頁)として一向に「共產主義者」にはお目にかからない。トレダーノのプリマ・ドンナ的演出はおよそ想像しえないこともないが、著者がついに「セルフ・スタイルの獨立マルキスト」(五五頁)なる名稱を發明するにいた

つては笑止の沙汰と云わざるをえない。著者の苦衷も察するに餘りあるのだが、ここいらにフィールド・リサーチの限界とジレンマがあるのではないだろうか。

せっかくの驚異的大册に對して、このような書評を献呈しなくてはならないのは殘念至極であるが、それはそれとして本書が後學の徒に貴重な資料を提供するものであり、この種の研究にとつて良き指導標となるであろうことは間違いない。

（賀川俊彦）

明治文化研究會編

『婦人問題篇』

（明治文化全集・第十六卷）

一　「明治初期以來の社會萬般の事相を研究し之れを我が國民史の資料として發表すること」を目的として、吉野作造・尾佐竹猛兩博士という尊敬すべき先達を中心に明治文化研究會が設立・發足したのは、すぐる大正十三年十一月のことであつた。ついで、翌年二月、同會の機關誌「新舊時代」（後ち、「明治文化研究」「明治文化」と改題さる）が創刊され、ここに明治史の攻究が、ようやく專家の手にゆだねられることとなつたのである。

昭和年代に入るや、吉野・尾佐竹兩博士は「明治文化全集」全二十四卷の編集・刊行を企圖され、世人の注視のうちにこの大業を見事に完成させて、明治史研究にかがやける金字塔をうちたてたことは、周知のごとくである。

それより、年をけみすることおよそ二十數年、戰後にわかに勃興せる明治史闡究の氣運は、「明治文化全集」の復刊をつよく要請するにいたつたのである。かくて、數年前より、舊版全二十四卷中より十三卷をえらび、これに加うるに、「自由民權篇（續）」「社會篇（續）」「婦人問題篇」の三編を新たに編集・追加した新版「明治文化全集」全十六卷の上梓が開始されたのであつた。

舊版を覆刻する十三編については、さすが當時における至高の碩學の嚴選になるものだけに、おおむね動かしがたい基本資料が收められており、その學的價値は今日にあつても微動だにしないが、より研究者の關心をよんだのは、新編集にかかる前記三卷の發行であつた。まことに學界の切なる期待にこたえた、機宜に適した擧というべきであろう。

このたび世におくられた「婦人問題篇」をもつて、新版刊行の事業は無事に結了する。このきわめて有意義な、しかし厖大かつ至難の業に眞正面から取りくまれた明治文化研究會諸氏の努力に對し、